

「火山がつくる地形 (5)」

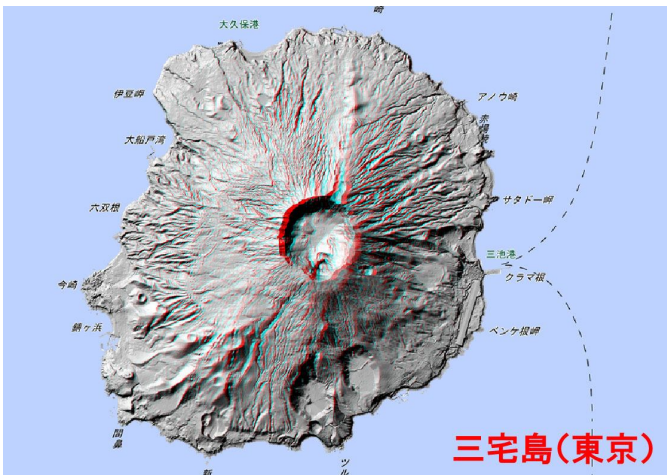
お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

(3) その地図をアナグリフ化して、専用 2 色メガネを使って立体視し、火山の地形を実感する。

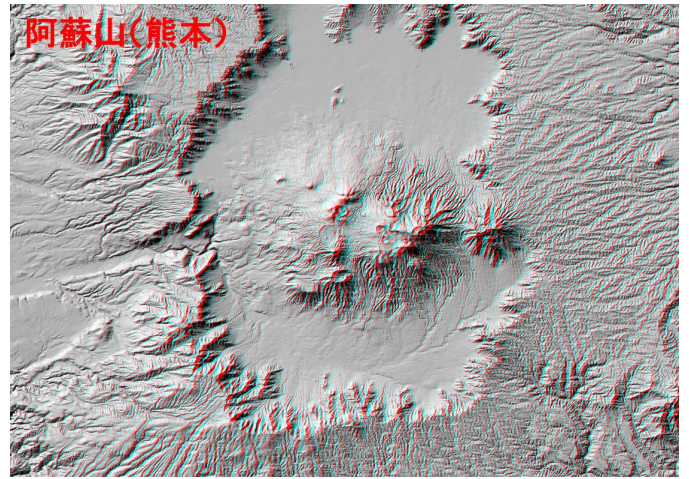
子どもたちが選んだ火山に、教師が付け加えたものを合わせて、約 25 座の火山をアナグリフ化して印刷、各研究所 (班) に貸し出した。



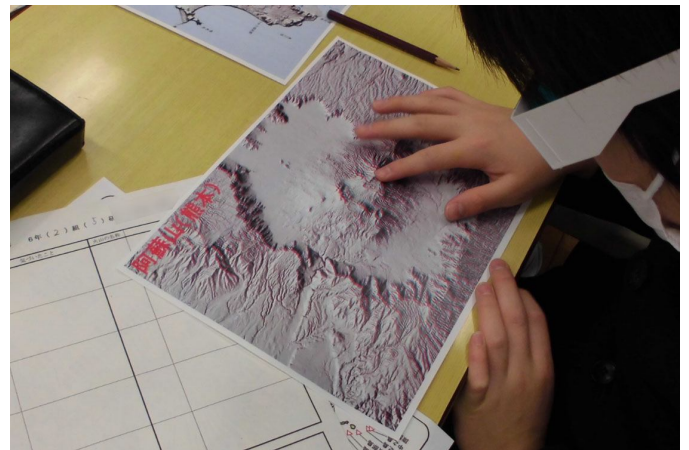
たとえばこれは三宅島のアナグリフ画像だ。東京都の伊豆諸島にあるこの火山島は、近年噴火をして、小学校が埋没するなどの被害を出している。(私は噴火直後にYS-11で島を訪れて簡単な調査をした) 顕著なカルデラとその火口壁、それに火口底やマール(丸い爆裂火口)などが鮮明に立体化して見てとれる。



実際にアナグリフメガネで観察すると、火口底が海面の高さ近くまで落ち込んでいる様子がわかる。メガネをかけたまま指を差し込むと、指が火口の中に入っているような錯覚を覚える。「東京都にもこんな火山があるのか!」と驚く子どもも多かった。



こちらは阿蘇山のアナグリフ画像である。巨大なカルデラの地形が、まるで火山の石膏模型のようによくわかる。外輪山に囲まれた盆地にあって、一か所だけ熊本平野に向かって流れだす川があることもわかる。



石膏模型とちがうところは、触っても凹凸の感触がまったくないことだ。それでも子どもたちは指先で触ってみて「このへんまで山が浮いて見える」と、やや興奮して観察していた。



アナグリフは、画像と目(観察者)の距離が遠いほうが、立体感が強調される性質がある。机上に置いて椅子の上に立って観察したり、床に置いて立って観察する姿も見られた。